

第409回 長野放送番組審議会

1. 開催年月日 平成22年3月3日(水) 午前10:30より

2. 開催場所 長野放送会議室

3. 委員の出席

○委員総数 10名

○出席委員数 9名

○出席委員の氏名(敬称略・委員は五十音順)

委員長 清澤 研道

副委員長 中村 重一

委員 井出 進子

委員 小出 貞之

委員 小松 正俊

委員 塚田 芳樹

委員 中西 満義

委員 丸山 仁也

委員 茂木 通則

4. 放送事業者側出席者

相崎 由松(代表取締役社長)

瀬木 潔(代表取締役副社長)

堀 眞一(代表取締役専務・報道局制作局担当)

関 義仁(取締役編成局・番組審議会担当)

松田 敏和(編成局長)

南 直敏(制作局長)

飯 鳶 憲彦(編成局編成部長兼視聴者室長)

山口 慶吾(番組審議会事務局長)

○議題

NBS月曜スペシャル

NBS開局40周年記念シリーズ

「あの時 この人 そして今・長野県西部地震25年」

1月25日(月)午後7:00~7:54

6. 番組の内容

1984（昭和59）年9月、木曾郡王滝村で死者・行方不明者29人を出すなど大きな被害をもたらした「長野県西部地震」から25年。当時の地震の体験者や犠牲者の遺族はその後の人生をどう生き、今、どのような思いを抱いているのか。また、大打撃を受けた村の現状は一。

開局40周年を記念して、過去のアーカイブ作品をもとに制作する「あの時この人そして今」シリーズの第8作目。当時放送した「証言・マグニチュード6.8～その時王滝村は…」をもとに、体験者や遺族の現在を取材した。

7. 審議の概要

- ・四半世紀、25年後というのは、あの災害を比較的冷静、客観的に振り返ることができるいいタイミングだった。
- ・当時の貴重な映像や、災害の体験者の25年後の生の声を通して、地震の恐ろしさを再認識するとともに、人の命や家族の絆、日々悔いのないように生きることの大切さなどを感じさせる質の高い番組だった。
- ・40周年記念に相応しい重いテーマを取り扱い、時間の流れを十分に感じさせる番組になっていた。
- ・四半世紀という節目で、王滝村を襲った突然の悲劇を、当時と現在を対比しつつヒューマンドキュメントという形で描いているが、「そして今」という部分をもっと知りたいという感じが残った。
- ・「災害は忘れたころにやってくる」という警告、周りの人たちの助け合いなどを通して立ち直っていく姿、村の経済の問題が描かれていた。
- ・災害の教訓が示され、考えさせられるいい番組だ。遺族の人生を生き抜いている姿や周りの人々の支えなど、美しい人間ドラマ的なものが流れていた。
- ・人と人が支え合う優しさや勇気といったものが番組の底に流れていた。
- ・災害の現場がどのように復興されたのか、どう変わっているのか
- ・人間の力で復興させた部分をもう少し入れて欲しかった。
- ・災害の教訓を伝えることの難しさを感じる中で、アーカイブ作品の意義を改めて示した番組だ。
- ・優れたヒューマンドキュメンタリーに仕上がっていたが、人間を追いかけた結果、当時の被害の規模など地震の全体像が見えにくかった。
- ・災害が、それに遭った人々の人生にどのように影響したかということと、自然の災害の恐ろしさがよく分かった。被災者の心の傷が消えないで残っている中で、立ち直っていく前向きな生き方が克明に出ていた。

- ・地震後、村の財政や産業がどのように変わったかなどの全体像があると良かった。